



カンボジア「大正学校」をみつめて

人間学部 人間環境学科 教授 落合 崇志

大正大学の国際 BSR 実践で忘れられてしまいそうな活動があります。グーグルマップでカンボジアアンコールワットの拠点シェムリアップ国際空港付近を拡大すると「Thai Syou Primary School」を見つけることができます。シェムリアップ市内でも「大正学校」と多くの市民に知られている小中学校です。大正大学鴨台会（同窓会）が建設支援をした学校です。

今から 20 年前にカンボジアは国際支援の風が吹きました。民主化にとともに各国公私が様々な分野への支援にとりかかりました。日本からは「教育の再興を！」と学校の校舎建設支援が 300 を超える実績を数えています。鴨台会もその一つを担いました。多くの支援団体は建設資金を拠出し、校舎が完成したらお祝い会に日本から出向くことが通常でした。が、

本学の取組みは違いました。

学内理解のもと、校舎建設に 20 名ほどの学生をボランティアとして現地に派遣したのです。初回に学生達は 6 日間にわたり木材を運び、セメントをこね、レンガを積み等々のサポートを展開しました。以来、校舎メンテナンスを目的に校地整備・植林・花壇・遊具等の環境整備を行いました。子ども達との交流活動としては運動会・図工絵画・歌唱指導等の教科外指導など、フィールドからの学びを 20 年間でのべ 240 名を超える学生が係わりを重ねてきました。

今年も 9 名の学生が子ども達の笑顔を学びに「大正学校」に行きます。「大正学校の現状」は、小中学生 420 名程が二部制授業で学んでいます。昨年には本学卒業生も加わる千葉県支援団体により校舎が寄

BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 21 号

平成 27 年 12 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079（直通）

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：研究ノート
- 3 頁：BSR トピックス
- 4 頁：BSR 図書室・今後の予定

贈されました。本学教員主宰の国際学会がシェムリアップ市で開催された折には、図書室設置の資金提供がされ子ども達が本を手笑顔になっています。初期に学生で参加していた、卒業生有志の資金援助により、現地教員の待望であった電気がひかれ、コンピュータも使えるようになりました。現地シェムリアップ教育局「大正学校」への継続支援に感謝の意を表しています。この 20 年「仏教系大学ができる国際 BSR」を小さな歩みでありましたが、継続することができました。

しかしながら、国際およびカンボジア情勢も大きく進展しています。より組織的な支援活動の実践のために諸般再考が求められています。当稿を契機とし、一人でも多くの方にカンボジア「大正学校」をみつめていただければ・・・。

研究ノート

仏教のもつ力

—学会・シンポジウム参加報告—

第 25 回佛教文化学会学術大会

12 月 5 日、大正大学において佛教文化学会第 25 回学術大会が開催されました。本年度のテーマは「地域社会と仏教」。午前中の各部会では、経典研究、思想研究のほか、過疎地寺院の問題や、ベトナム寺院の社会福祉活動、原発避難寺院の現状などの現代的テーマにつながる研究発表も行われました。

午後は、弓山達也氏（前大正大学人間学部教授・現東京工業大学教授）による、大正大学の地域での取り組みを通じて感じた仏教のもつ力についての講演がありました。

また、名和清隆氏（浄土宗総合研究所研究員・淑徳大学非常勤講師）、鶴飼秀徳氏（日経ビジネス記者、『寺院消滅』著者）、長江曜子氏（聖徳大学教授・日本葬送文化学会会長）から、過疎地浄土宗寺院の現状、疲弊する地方のなかでみられる各寺院の新たな取り組み、そして、墓地をめぐる文化の変容についての報告を受け、弓山氏をコメントーターに迎えたパネルディスカッションが行われました。



NPO 法人でもくらしいと大正さろん

大正大学は、NPO 法人「でもくらしい」を設立し、2005 年から 2012 年まで庚申塚通りにコミュニティスペース「大正さろん」を運営していました。

弓山氏は、2010 年から運営スタッフとしてたずさわることになりましたが、最初に利用者から言われたことは意外にも「花まつりがしたい」という、仏教行事の催行リクエストだったといいます。ここから、地域住民、学生、宗教者（僧籍を持つ大学院生）が一体となった場づくりが行われました。授業も「大正さろん」で行われ、学生と地域住民が同じ時間と場所を共有するという両者にとってあまり体験したことのない場が生まれました。

この場は両者の交流を生み、創造的な空間となったようです。学生と地域住民との意見交換によって、「大正さろん」では 2010 年に花まつり法要が行われました。また、翌年（2011 年）には花まつりにあわせた東日本大震災物故者供養、被災地支援活動、戦没・被災者慰霊ツアー（靖国神社、千鳥ヶ淵戦没者慰霊、東京慰霊堂）などが実施されたといいます。

地域社会における仏教の力

このような授業での取り組みを通じ、弓山氏は地域社会において仏教が持つ価値を以下の 5 つのキーワードで提示します。

- 1) つなぐ：僧侶は地域のご意見番・相談役であり、寺院は意見交換の場である。
- 2) みつめる：祈りは自己の内面やライフスタイルを見つめる技術に通じる。

- 3) つどう：行事は異なる文化を超える力を持ち、他者への配慮を育む。
- 4) はせる：目をつぶり、手を合わせることで過去・文化を超えて思いを巡らせることができる。
- 5) ささえる：寺院は地域社会の生涯教育施設／コミュニティセンターとなりうる。

これらは、地域社会が仏教に対して大きな期待を寄せていることを示すものであり、同時に今後の仏教再興、寺院活性化には欠かせないポイントとなるでしょう。



地域社会に出る意味

パネルディスカッションでは、寺院活性化を考えるうえでいくつかの課題も提示されました。

たとえば、過疎化などの社会変動に個人（個人）の能力で立ち向かうのには限界がある、組織（教団）としての有効な対策はないだろうかというものです。残念ながら現状は、僧侶の個々の力量によるところが大きいようです。

しかし、鶴飼氏は、たとえ檀家数が多く豊かな寺院であっても、それに胡坐をかいていたら淘汰されるだろう、今は厳しくとも檀家や地域社会に必要とされる活動を行う寺院は生き残るだろうと言います。

では僧侶が地域に出る意味は何か。困難の多い社会へ自ら出るメリットは何なのか。

弓山氏は、「リカレント教育」の場として地域社会をとらえます。自分の宗派（宗教）の言葉（世界観）が通じない世界では、それらを言い換えなければなりません。その経験を通じて、自分の信仰を真摯に見つめることができる。すなわち、社会に出ること、他者と出会うことは、自身の信仰を深める機会でもあるといえます。

それはめぐりめぐって僧侶の本分たる、「祈りの力」へも影響を及ぼすものでしょう。

「死者供養を考える」

佛教文化学会の 1 週間前、11 月

28 日、清泉女子大学で池上良正氏（駒沢大学教授）を招き、「死者供養を考える」というシンポジウムが開かれました。池上氏は、長年シャーマニズムと呼ばれる民間巫者の研究を通じ、死者供養の研究を行ってきた宗教社会学者です。

池上氏によれば、死者供養とは、追善回向などの教義にもとづき、生者による読経・法会・布施・写経などの積徳行為を死者の救済に転用しようとする儀礼的实践であり、東アジアに展開した「生者が死者を救うことによって、自らの救いも得る」というユニークな救済システムであるといえます。

近年、既成教団宗教の衰退が叫ばれるなか、儀礼・形式を持たない供養は「グリーンケア」として注目を集めています。しかし、歴史を紐解けばそれらは

伝統宗教の儀礼が担ってきた部分であり、いかにいえば仏教者による死者供養は「グリーンケア」として機能していたといえるでしょう。

祈りの力は自身の信仰を深めることでしか強化しえません。そして、信仰を深めることと地域社会へ出ることは矛盾するものではありません。地域での活動が僧侶の地力を高める、そんな正の循環が今後期待されます。（T）



BSR トピックス

去る 11 月 3 日、大正大学鴨台祭のイベントの一つとして、「ぶっちゃけ堂トークショー」（主催＝大正大学仏教青年会 部長：仏教学科種村隆元先生、学生代表：仏教学科片山雅矢君）が開催されました。本学仏教青年会（以下、仏青）の創立 50 周年記念ということで、運営に当たった学生たちも念入りに準備をすすめ、熱い思いで当日を迎えました。

当イベントは、テレビ朝日「ぶっちゃけ寺」（毎週月曜日午後 7 時放送）に出演している井上広法師（浄土宗）、千葉公慈師（曹洞宗）、大來尚順師（浄土真宗本願寺派）のお三方によるトークショーで、テレビでも言えない「ぶっちゃけ」た話しを聴き出そう！というコンセプトで行われました。

仏青には、さざえ堂の学生お堂番ボランティアとしてご協力いただいています。そのご縁で、BSR 推進室小川・高瀬両研究員と旧知の仲である井上師にお声掛けし実現したものです。

会場の 1021 教室には 250 名を超える方にお集まりい

ただき、立ち見でも入りきれないほど盛況でした。

トークショーは、仏青の学生副代表袖山栄純君（仏教学科 2 年）の司会進行で、事前に募っておいたお坊さんへの質問・疑問を 3 人に投げかけ、答えていただくという流れで進みました。

途中、質疑応答から話が派生（脱線?!）していく場面も見られましたが、終始和やかに、かつ熱のこもったトークが展開されました。特に、なぜお坊さんになろうと思ったのか、「ぶっちゃけ寺」を始めるにあたって、仏教をより身近に感じて欲しいとの思いをお話いただいたところは、お三方のとても真摯な姿勢が伺い知れるもので、BSR の精神を具現化した活動であることが分かりました。（M）



BSR 図書室

平山昇著『鉄道が変えた社寺参詣』

(交通新聞社、2012 年、800 円 + 税)

正月の伝統行事といえば初詣。寺院や神社にお参りに行く人も多いでしょう。あるいは、本学のばあい、僧侶として初詣にくる参拝客の御接待に追われる人もいるかもしれません。

では「初詣」という伝統行事は、いったいつから私たち日本人の文化として根付いているのでしょうか。江戸時代？室町時代？もっと昔から？…さにあらず。実は明治以降、鉄道網の発達とともに「初詣」が日本人の年中行事として広く浸透していったのです。

近代以前、正月に社寺へ参拝する際には、「初縁日」や「恵方詣」が基本でした。「初縁日」とは、その年初めての縁日に参詣することで、初大師（1 月 21 日）、初地蔵（1 月 24 日）、初天神（1 月 25 日）などに代表されるものです。「恵方詣」とはその年の恵方（おめでたい方角）にある社寺に参詣するというもので、十干にしたがって年ごとに方角



が定められています。つまり、どちらも、「いつ」あるいは「どこに」お参りするかがきちんと決まっていた。しかし、「初詣」はそれらとは大きく異なります。正月のうちにどこかの社寺にお参りに行くという、厳格なルールをもたない参詣方法は、鉄道網の整備による人の移動距離の拡大、鉄道会社の宣伝広告や割引サービスによる利用増進などによって、明治期以降に主流になったのだといえます。

明治期は、インフラの整備によって人々の社寺参詣が後押しされた、そんな時代だったのです。現代では当たり前のように定着している「初詣」の裏側にこのような近代的な交通事情があったとは興味深いですね。(T)

今後の予定

12 月 19 日 (土) 11 時～12 時
9 時～13 時
13 時～15 時
15 時

花会式 (天台宗)
あさ市
お坊さんカフェ「僧話花」
天台声明公演

鴨台観音堂前
南門 けやき広場
5 号館 1 階
礼拝堂

1 月 23 日 (土) 11 時～12 時
9 時～13 時
13 時～15 時

花会式 (真言宗智山派)
あさ市
お坊さんカフェ「僧話花」

鴨台観音堂前
南門 けやき広場
5 号館 1 階



巻頭言執筆者 紹介

落合 崇志 (おちあい たかゆき)

大正大学 人間学部 人間環境学科 教授

大正大学 文学部 卒業

佛教大学大学院 社会学研究科 博士課程 単位取得満期退学
専門は、環境福祉学、環境文化・環境コミュニティ論、思想・環境・福祉を中心とした仏教社会論から「生活」を基軸にした環境の考察。
浄土宗所属

表紙写真

(上から) 20 年前・10 年前・現在のカンボジア「大正学校」